

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(14)

講題：日本における人文学パラダイムとしての東アジア世界論

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 14 回は、早稲田大学文学学術院 李成市教授による「日本における人文学パラダイムとしての東アジア世界論」である。本講義はオンラインによって行われた。

最初に李教授は講義の要旨を述べた。「東アジア世界論」は日本史を世界史の中に位置づけるため、1970 年代に東京大学教授西嶋定生が提唱した歴史理論である。戦後日本の歴史学界において、それはグランド・セオリー (Grand theory) ともいうべき役割をはたし、今なお日本の歴史教科書の叙述で、さらに学術論文でも「東アジア史」の枠組みを規定している。ただし、この論は当初より日本、韓国、中国からさまざまな批判を受けてきた。それにもかかわらず、少なくとも日本の歴史学界で用いられる「東アジア」という地域概念はこの「東アジア世界論」の影響下にある。

提唱から半世紀が経った「東アジア世界論」とその議論を裏付ける基礎理論＝冊封体制論を批判的に検討し、この理論の射程と有効性の検証を試みることに、これが本講義の目的である。

自明ではない「東アジア」の歴史と文化

まず李教授は「東アジア」とはどの地域を指すのかに言及した。日本の歴史教育・歴史学界においては中国、朝鮮、日本、ベトナムを呼び、ジャーナリズムの世界では ASEAN10 カ国プラス 3 国 (中国、日本、韓国) を指す。東アジアへの注目は NIES (韓国、台湾、香港、シンガポール) の経済発展を契機とするが、この地域を漢字文化圏、儒教文化圏、中国文化圏と捉え、一つの文化圏としてクローズアップするようになった。

西嶋定生による東アジア文化圏の標識は次の四つである；①漢字 (コミュニケーション手段)、②儒教 (政治理念、家族体系を規制する思想体系)、③漢訳仏教 (中国化された仏教、大乘仏教)、④律令 (法体系)。これらを共有した地域を一つの文化圏として設定した。そして中国皇帝と君臣関係になる冊封体制 (政治圏) と上記の文化圏の重なりを「東アジア世界＝地域」と規定した。

東アジア世界論の有効性 批判的検討のために

李教授によると、西嶋氏の「東アジア世界論」への批判は次の二点に整理される。

①西嶋氏に直接関わる問題；この理論は政治圏と経済圏を混同しているという批判。

氏自身もその領域を固定的に捉えるべきでない」と述べたために、地理的範囲の混乱、曖昧化を招いた。

②西嶋氏の理論から派生した問題；冊封体制は限られた時代（6～8世紀）と地域（中国と東辺諸国）で検証、理論化されたものであり、それ以外の地域では検証されていないという批判。

東アジア世界論の問題意識：なぜ東アジア文化圏＝漢字圏の形成が問題になるのか？

東アジア文化圏や東アジア世界はどのような問題意識から課題となったのか。それを解明することは、「東アジア」の地域規程の曖昧さを取り除き、その文化圏の形成の問題点を明確にする。

西嶋定生の世界史の構想

西嶋氏は1950年代に共同で教科書を執筆した歴史家上原専祿から影響を受けた。上原氏はアジア・アフリカ諸国と連帯して、ヨーロッパからの支配と従属の構造を転換することを課題に掲げ、自らの世界史像の原理を構築した。西嶋氏は上原氏の理論を応用し、複数の世界のありようを考えた。

東アジア論の課題

西嶋氏の東アジア世界論は、中国、朝鮮、ベトナム、日本の有機的連関性が古代以来、歴史的に根拠ある地域世界として形成されたことを示そうとした。したがって西嶋氏の世界論がいかなる手続きを経て、漢字文化圏の形成を説得力ある形で提示できているかが問題となる。これを検証することは歴史研究者である李教授自身の課題でもあるという。

東アジア世界論の克服を目指して

東アジア世界論は1950-60年代に日本と世界が直面した課題と不可分である。それゆえ現代において、同じ課題を以て東アジア世界論を語ることはできない。すなわち、今日、東アジア文化圏の形成を語るものがどのような意味を持つのかを考えなければならない。そうでなければ「東アジア文化圏の形成」はありえない。

一国では見出せない諸問題の解決に対し、広い地域を設定することで、問題の共通性を見出し、共に問題の解決の方法を歴史的に検討することが必要である。

(Web サイト：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿：塚本善也・日文系副教授)